

訳者あとがき

先進工業国では、1980年代半ばより子どもをもつ女性の労働市場進出が顕著になってきました。アメリカでは、子どもの発達保障と財源の効果的な配分との両立を果たすべく、集団保育の質を測定する尺度が多く開発されています。つまり、尺度を用いて保育の質を数値化し、それを根拠として営業許可なり補助金を与えるという仕組みなのです。

本書の原著、テルマ・ハームス博士らによるITERSは、同博士らによる一連のERS（保育環境評価スケール）の一つです。まず1980年にECERS、すなわち3～5歳の幼児版保育環境評価スケールが開発・発行されました。1989年にはファミリー・デイケア、日本で言うところの家庭的保育版FCCERSが発行され、1990年にITERS（初版は0～2歳半）が発行されました。

ERSはその使いでのよさで、その後多くの調査に使われ、アメリカ国内だけではなく、世界に広がって行きました。特に有名なのがイギリスのEPPE研究（1997-2003）です。この研究ではECERS-R（改訂版、日本語訳『保育環境評価スケール①幼児版』）が用いられました。併せて、項目の一部をイギリスのナショナル・カリキュラムの内容に沿ったものに特化させたエクステンション版が用いられ、ECERS-Eとして2003年に発行されました（日本語訳『新・保育環境評価スケール③考える力』2017年）。

最新のECERS-3とITERS-3を見ると乳幼児期のLearning、つまり学びを育てる重要性が強調された内容になっています。「はじめに」でも述べましたが、日本では平成29（2017）年に告示された幼稚園教育要領等で幼児教育が強調され、「育みたい資質・能力」が明確化されました。保育所保育指針では「学びの芽生え」に注目し、3歳未満児の保育の意義がより明確化されました。それは安直な早期教育に対する警鐘であり、乳幼児に備わった「知りたい、確かめたい」という探究心の発露を受け止め発展させる、物的・人的環境の充実が喫緊の課題となったことを意味しているのではないのでしょうか。

2004年に訳出したITER-R（『保育環境評価スケール②乳児版』）と比較し、保育者からの言語的な関わりを見る項目がぐんと増えています。これは乳幼児の学びにおとなからの関わりが不可欠であることを示しています。そしてその関わりとして何をすればよいのかが、非常に具体的に述べられています。

一連のERSを翻訳してきましたが、本書はその5冊目です。

『新・保育環境評価スケール』は①3歳以上、②0・1・2歳、③考える力と、3部出揃いました。他にも、SSTEW、MOVERSの日本語訳が出版されています（順に『「保育プロセスの質」評価スケール』明石書店発行、『「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール』同発行）。それぞれが特性を発揮し、使いこなされ、日本の保育の質の向上に貢献することを願ってやみません。

刊行にあたり、引き続き法律文化社の田摩純子氏にお世話になりました。深く御礼申し上げます。

埋 橋 玲 子